

トマス・ジェファソンのインディアン論

清水忠重

## Summary

### Thomas Jefferson's Understanding of the Indians' Nature

Tadashige Shimizu

Jefferson's understanding of the Indians' nature makes an excellent contrast to his understanding of the Negroes'. He thought that as the blacks were inferior to the whites in the endowments both of body and mind, they could not become sound and constructive citizens of the republic. He also thought that the mixture with such an inferior race would deform "dignity and beauty" of the whites and throw the gradations made by Nature into confusion. Advocacy of Negro colonization beyond the boundary of the United States was the logical conclusion of his white republic ideal.

On the other hand, Jefferson believed that the Indians were in body and mind equal to the whites, and that they possessed the reason as the whites did. In *Notes on Virginia*, he depicts on the mental quality of the Indians that "they astonish you with strokes of the most sublime oratory; such as prove their reason and sentiment strong, their imagination glowing and elevated." He also recollects in a letter to John Adams that when he was about twenty, he listened to the splendid oration of Outassete, a leader of the Cherokees, "with awe and veneration." We can see the old image of "noble savages" in these words.

The main pillars of Jefferson's Indian policy are to be summarized as civilization and assimilation. Jefferson often urged the leaders of the Indian tribes to adopt "our mode of living" or "new mode of life," that is, agriculture, domestic manufacture and representative democracy. He also addressed to them frequently that "we shall all be Americans; you will mix with us by marriage, your blood will run in our veins, and will spread with us over this great island." These proposals are said to have been derived from the consciousness of the same nature.

## はじめに

ジェファソンは、人間（具体的にいえば白人、さらに限定すれば白人男性）には理性と道徳感覚が生まれながらにして備わっていると考えており、白人（男性）にそなわるこの二つの資質を、十全の意味での人間の条件であるとした。またかれは人間の「資質」と「権利」とを連動させてとらえていたので、人間としての権利は人間の資質を備えたもののみ賦与されるべきであると考えていた。本稿ではまずジェファソンのインディアン政策の特徴を取り上げて検討し、ついでその政策の根底に横たわるインディアン観（インディアン本性論）へと言及する。そしてジェファソンがインディアン（本性）をどのようにとらえていたかという点を、かれの黒人論と対比しつつ見ていくことにしたい。

## 一、インディアン政策

ジェファソンが大統領在職中に熱意をもって取り組んだインディアン政策の基本は、一言でいえば文明化あるいは同化政策と呼ぶことのできるものである。インディアンに対しておこなった数々の呼びかけのなかで、かれはしばしば「われわれの生活様式」(our mode of living)あるいは「われわれの生活様式」(new mode of life)を採用して(1)くださいと語りかけている。この文明化の勧めは具体的にいえば、インディアンに狩猟生活をやめさせ、白人の技術指導のもとに農業、

家畜飼育、家内工業（紡績、織布、鍛冶など）を教えこむことであった。たとえばデラウェア、モヒカン、マンリー族の指導者ヘンドリックに対して、次のように述べている。インディアンはこれまで鹿や野牛を追う生活をしてきたが、これらの動物が減少した現在では食料もおもむにまかせなくなり、人口は減少の一途をたどりつつある。しかし白人は大地を耕し、家畜を飼育する習慣があるので、食料や衣服にめぐまれ、二十年ごとに人口を二倍にふやしている。したがってもしインディアンも人口をふやしたければ、狩猟生活をやめて大地を耕すべきではないのか、と。ここからさらにかれは次のように提言する。

「わが息子たちよ、あなた方が人口の多い偉大な人民になれるのは、あなた方次第だということがお分かりですね。ですから、まずはじめに現在あなた方に与えられている土地の上で、あらゆる人に農地を与えなさい。各人に土地を囲わせ、その土地を耕させ、そこに暖かい家を建てさせなさい。そしてその人が死んだときには、その農地を妻やかれのあとをつぐ子供たちのものとしなさい。大地を耕すことを学ぶことほど、容易なことはありません。あなたの方の女たちもみなそれを覚えます。それをもっと容易にするために、われわれはいつでも鋤や鍬や必要な用具の作り方をよるこんでお教えします。もし男が女から大地の労働をとりあげるようになれば、女は紡ぎ、織り、家族の衣服をこしらえることを覚えるでしょう。このようにしていけば、あなた方は多くの子供を育てられるでしょうし、あなたの方の人口も二十年毎に二倍にふえて、あなたの方の友人が与えてくれた土地を、まもなく一杯にするでしょう」(4)。

一八〇三年一〇月の第三次年次教書のなかでジェファソンはインディアン諸部族のあいだに農業と家内工業 (household manufacture) が浸透しつつあることを報告している。<sup>(6)</sup>そして大統領在職中、かれはインディアン個人の個人に土地を囲わせて農業を営ませ、土地所有の観念、私有財産の観念を身につけさせることに熱意をもって取り組んでいる。一八〇六年にマンダム・ネーションにあてた呼びかけでは、インディアン青年が農業を身につけ、娘たちが紡績、織布、裁縫などの有益な技術を学ぶことのできるような学校をデトロイトにつくる構想を打ち明けているし、すでにカークという人物を送り込んで農業と織布の指導にあたらせていたシャワニー・ネーションに対しては、一八〇七年にさらに大工と鍛冶屋を派遣することを約束している。<sup>(7)</sup>また一八〇九年にはオタワ、チピワ、ポウテワタミ、シャワニー、ワイアンドットの指導者たちに対して、チェロキーはすでにノックスヴィル近郊のタウンに立派な農場と家を持ち、多数の牛や馬を飼って生活していること、しかもかれらは余剰農畜産物ができれば、それをノックスヴィルに運んで白人に売り、そのお金で衣服その他の日用品を購入していることを告げ、デトロイト周辺でもこうした交易がおこなわれるようになってほしいと述べている。<sup>(8)</sup>

この文明化政策はさらにいえばインディアンを白人との混血によって同化し、アメリカ市民として合衆国内に組み込むことをも目指していた。先ほど引用したヘンドリックにあてた一八〇八年の呼びかけのなかでジェファソンは、「あなた方が一たび財産をもつにいたりますと、財産や人身を保護し、あなた方の間で罪を犯すものを罰するために、法律や

行政官が必要となるでしょう。われわれの法律がこの目的のためにはよいものであるとお気づきになり、その法律の下で暮したいとお望みになるでしょう。またわれわれと連合し、われわれの偉大な議会に参加し、われわれと一国民を形づくることになるでしょう。そしてわれわれみんながアメリカ人となるでしょう。さらに結婚によってわれわれと混血し、あなた方の血がわれわれの血管を流れ、われわれと一緒にこの大きな島をおおってひろがって行くでしょう」と述べている。<sup>(9)</sup>

この混血の提唱はジェファソンのインディアンに対する呼びかけの中に次のように繰り返して出てくる。

「かれら（イギリス人——筆者）の助言してきた進路はあなたがたを現在の人数にまで疲弊、減少させてしまいました。しかし、節酒と平和と農業はあなたがたの人口を祖先がそうであった時のように増やし、あなたがたが財産を所有し、整った法律の下で暮らす意欲を高め、われわれと一緒にあってわれわれの政府に参加し、われわれと社会的に合流する道を整えるであります。そして合流したあなたがたの血とわれわれの血は偉大な島の上でふたたび広まっていくことであります」(マイアミ、ポウテワタミ、デラウェア、チピウェイへの呼びかけ。一八〇八年二月二一日付)。<sup>(10)</sup>

「われわれはあなたがたが財産を所有し、その財産を整った法律によって守るようになるのを望んでいます。やがてあなたがたはわれわれと同じようになるでしょう。あなたがたはわれわれと一緒に一国民を形成するにいたるでしょう。あなたがたの血はわれわれと混ざりあうでしょう。そしてわれわれの血と一緒にあって、この偉

大な島の上で広まっていくことでしょう」(ワイアンドット、オタワ、チピワ、ポウテワタミ、シャワニーの指導者への呼びかけ。一八〇九年一月一〇日付)<sup>(11)</sup>。

この呼びかけは対外向けのたんなる外交辞令としてなされているのではない。ちなみにジェファソンは白人のベンジャミン・ホーキンスに宛てた手紙(一八〇三年二月一八日付)のなかでも同じように、インディアンを「合衆国市民としてわれわれのあいだに受け入れることは、ものごとの自然の進歩が成就しようとしているところの事柄であります。ですからそれは、遅らせるよりも促進するほうがいいといえましょう。かれらとしても、別個の国民でありつづけたなら遭遇するかも知れない数多くの危険に身をさらすよりも、われわれと一つになって、いまいる土地を占拠しつづけるほうがはるかにいいであります<sup>(12)</sup>」と論じて、インディアンを市民として組み込むことを提案している。

インディアン問題を混血と同化政策によって解決しようとするこの考え方は、じつはジェファソン固有のものではなかった。数多くのポウアタンの子孫がそうであったように、ヴァージニアにはインディアンを血を引くことを誇りとする者たちが多数いたし、またパトリック・ヘンリーは一七八四年にヴァージニア州議会の下院(the House of Delegates)で、州政府はインディアンと結婚する者の税金を軽減し、生まれてくる子供の教育と養育に補助金を出すべきであるとする法案を提出して、混血政策の推進をとなえている<sup>(13)</sup>。ジェファソンの見解はこうした世論の一端を代弁したものであり、それはたんなる口先だけのゼスチャーではなかった。もちろんこの種の政策の裏にはイギリスとの対抗上、インディ

アンの友好をつなぎとめておきたいとする政治的、軍事的な考慮が働いていたことは事実である。しかしそうした点を差し引くとしても、混血の提唱はインディアンの人種資質を白人のそれと同格とみなす考え方が根底になければ出てこなかったはずのものである<sup>(14)</sup>。

ジェファソンのインディアン政策は以上のとおりであるが、この政策の思想的な限界について一、二見ておこう。ジェファソンが文明化政策を推進しようとする際の動機は二つあった。ひとつは人道主義的な信念に発するものである。ジェファソンは文明化がインディアンの生活上をもたらし、かれらのためになるものであることを信じて疑わず、自分の善意になんら疑問を感じてはいなかった。たとえば一八〇五年の第二次大統領就任演説(一八〇五年三月四日)では、インディアンに「農業と家内工業(domestic arts)を教えることを人間性はわれわれに命じています(humanity enjoins us to teach them agriculture and the domestic arts)」と述べているし、文明化政策のことをしばしば「人道主義的な仕事(humane work)」<sup>(15)</sup>、「純粹な道徳に合致する(consistent with pure morality)」<sup>(16)</sup>企て、「周辺原住民の幸福のために追求してきた慈善的プラン(the benevolent plan)」<sup>(17)</sup>であると表現している。

しかしジェファソンのこの道徳的な信念は、白人の生活様式を神聖視し、絶対視する独善的な思い込みによって裏打ちされていた。文明化政策が白人文明の押しつけ、善意の押し売りになるのではないかというような反省はかれにはなかったし、自分の依拠する価値観や文明を相対化するような視点もなかったように思われる。ちなみに第二次大統領就任演説のなかでかれは、文明化政策を拒否するインディアンに対する苛立ち

の感情を次のように表明している。

「現在の生活の行く手に待ち受けている運命をかれらに知らせ、かれらに理性を行使して、理性の命ずるところに従うようながし、状況の変化とともに営みをも変えるようながす努力は、強力な障害に直面しています。すなわち、かれらは、肉体上の習性、精神上の偏見、無知、高慢、かれらのなかにいる偏った狡猾な人々

——つまり事物の現存の秩序になにか気分の良いものを感じ、ほかの秩序のなかで存在価値のなくなってしまうことを恐れている人々——の影響力、こういったものに邪魔されているのであります。このような人々は、祖先たちの習慣に対する殊勝げな尊敬を諄々と説き、祖先がなしたことはなにごとによらず、あらゆる時代を通じて行われねばならない、理性はまちがった案内人であり、理性の勧告にしたがって肉体上・道徳上あるいは政治上の状態を前進させることは、危険な革新である、おまえたちの義務は、創造主がおまえたちをつくり給うたままにとどまっていることであって、無知が安全なのであり、知識は危険にみちている、と説いているのであります<sup>(19)</sup>」。

このように述べたあとジェファソンは、文明化政策に反対し、従来どおりの狩猟生活をつづけていきたいと願っているインディアンを「理性」の導きにしたがおうとしない頑迷なだけの人間と決めつけ、「反哲学者<sup>(20)</sup> (anti-philosophers)」と規定して、焦燥感をあらわにしている。要するにその人道主義は、白人文明が誰にも通用する人類普遍のものであり、それへの同化は疑問の余地のない善であると信じきっている独善性

で裏うちされていたといえる。

この思想的な偏狭さを、時代一般の限界に帰するわけにはいかない。この時代のまた別の人物、たとえばベンジャミン・フランクリンを例にとつていえば、かれは『北アメリカの野蛮人に関する寸言』(一七八二年)の中で、「われわれは彼ら(インディアン——筆者)の風習がわれわれのとちがうので、彼らを野蛮人呼ばわりしている。われわれは自分たちの風習が礼の極致と考えているが、彼らも彼らの風習を同様に考えているのである<sup>(21)</sup>」と述べて白人本位の独善的な見方を批判した上で、次のようなエピソードを紹介している。それはヴァージニア政府とインディアンの六部族連合(イロクォイ族連合)が条約を結んだ際、ヴァージニアの委員たちがインディアンに、もしウィリアムズバーグに六人のインディアンの若者を送ってよこすなら、かれらに大学教育をほどこしてもよいという申し出をしたときのものであるが、この申し出に対してインディアン側は、こう答えたという。以前われわれの中の数人の若者が白人の大学で教育を受けさせてもらったことがあるが、かれらがわれわれのところにもどってきたとき、小屋の建て方、鹿の捕らえ方、敵の殺し方などインディアンに必要なことはなにひとつ知らず、結局獵師にも戦士にも助言者にもなれないというまったくの役立たずになってしまった、と。そしてこう述べた上でインディアンの代表たちは白人の申し出を丁重にことわり、「われわれの感謝の気持ちを示すために、もしヴァージニアの方々がご子息を十二人当方にお送りくだされば、われわれはその方たちの教育に気を配り、われわれの知っていることすべてを教え、一人前の男にしてさしあげましょう<sup>(22)</sup>」と言ったという。フランクリンに

はこの痛烈な皮肉を含んだエピソードを紹介するだけの心理的なゆとりがあったわけであるが、ジェファソンには白人文明を相対化するそうした視点はなかったように思われる。

ジェファソンが文明化政策を推進しようとしたもうひとつの動機は、インディアンに農耕を教えることによってかれらの所有する広大な土地を白人の側に譲渡させることができるという打算的なものであった。インディアンが農耕と家畜飼育を習得するなら、かれらはより狭い土地で生計を立てていくことができる。しかも従来よりも狭い居住圏で狩猟時におけるよりもいっそう豊かな生活を送ることができるようになるという考え方である。この点をジェファソンはインディアンの指導者たちに繰り返し次のように語りかけている。

「穀物栽培と家畜飼育をすれば、鹿やバッファローを追う土地の百分の一の土地で充分うまくやっていけるでしょう」(デラウェア族、モヒカン族、マンリー族の指導者ヘンドリックに対する呼びかけ)<sup>(23)</sup>。

「充分な家畜をそなえ、改善された小さな土地があれば、家畜のいない、あるいは改善されてない広大な土地よりもっと多くのものを産することでしょう」(ブラザー・ハンサム・レイクあての呼びかけ。一八〇二年一月三日付)<sup>(24)</sup>。

「土地を耕作すれば勞せずして、あなたがたがいまおこなっている狩猟がもっとも首尾よくいった場合よりも、もっと多くの食料を産するようになるでしょう」(チカソー・ネーション、ミンゲイ、マタハ、ティショ・ホタナの指導者たちへの呼びかけ。一八〇五年三月

七日付)<sup>(25)</sup>。

「トウモロコシと綿花の栽培できるすこしの土地があれば、もっとも広大な土地が狩猟によって提供することのできるよりも多くの食料と衣類を提供するでありましょう」(マッキントッシュとクリーク・ネーションの指導者たちへの呼びかけ。一八〇五年一月二日付)<sup>(26)</sup>。

このようにしてインディアンの農耕生活が軌道に乗るならば、当然土地の余剰が生じることになる。そうした土地を白人の側に譲らせることができるなら、それは双方にとつての善であるとジェファソンは考えていた。白人のベンジャミン・ホーキンス (Benjamin Hawkins) にあてた手紙(一八〇三年二月一八日付)のなかで、かれはこの点を次のように論じている。

「私は狩猟を営むだけではもはやインディアンに衣類と食料を供給するのに充分ではないと思っています。それゆえ農業と家内工業 (household manufacture) をうながすことが、かれらの生存を維持していくうえで本質的に重要なのでありまして、私はこれに惜しみない援助をあたえ奨励する所存であります。こうしますとかれらはずっと狭い土地でも生活することができ、じつにかれらの広大な森林は家畜の放牧のためにいる以外は不要になってしまいます。しかもかれらが立派な農夫になるにつれて、放牧場としてすら不要となり、不都合なものとなってしまいます。かれらが狭い土地で立派に生計を立てていくすべてを学んでいるうちに、われわれの増大しつつある人口はよりいっそう広大な土地を必要とするようになるでし

よう。こうして手放すことのできる土地を持ち、土地以外の必需品をほしがっているひとびとと、そうした必需品は余分にもっているが、土地は持っていないというひとびととのあいだに利害の一致 (a coincidence of interests) が生じることになります。したがってこの取引は双方にとっての善をもたらすのでありまして、双方のためを思うものはこれを促進すべきであります<sup>(27)</sup>。

しかしながらジェファソンの文明化政策はひとつの壁に直面せざるをえなかった。それは、かならずしもすべてのインディアンが文明化を率直に受け入れようとしたわけではなかったことである。たとえばチェロキー・ネーションの場合、文明化路線の採用に踏み切ろうとするひとびとと、狩猟生活にあくまで固執するひとびとの二派に分裂するにいたっている。ジェファソンにとっての課題は、この狩猟派をどうするかであったが、かれが最終的に行き着いたのは、これを西方に移住させることであった。この構想は、ジェファソンの執政期に合衆国がフランスからルイジアナ地域を購入したのを機に、一挙に現実味を帯びることになる。ちなみにジェファソンはホレイショ・ゲイツ將軍 (General Horatio Gates) にあてた手紙 (一八〇三年七月十一日付) のなかで、連邦議会は「これ (ルイジアナ——筆者) を、ミシシッピ川以東のすべてのインディアンを西方に移住するようながし、われわれの人口を拡散させるのではなく (まずもってミシシッピ以東の地域に——筆者) 密集して定住させるための手段として使うことができます<sup>(28)</sup>」と述べている。またインディアンに対しては、たとえば一八〇五年三月にチカソー・ネーション、ミンゲイ、マタハ、ティシヨホタナの指導者に対して、「われわれ

は最近、フランス人とスペイン人からルイジアナと呼ばれるミシシッピ川以西のすべての土地を入手しました。そこには赤い肌をしたひとびとが住んでいない広大な土地があります。しかしそこはあまりにも遠隔地なので、われわれはあなたがたが手放す意向のあるミシシッピ川以東の土地と引き換えに、その土地を提供するか、あるいはお金とあなたがたのもっとも望む品物とを提供したいと思っています。この問題に関して今あるいは将来、なにか考えがありましたら、われわれはいつでもあなたがたに耳を傾ける所存です<sup>(29)</sup>」と呼びかけている。

このようにジェファソンのインディアン政策は、その後連邦政府のインディアン政策として定着していくことになる西方移住の政策へと収斂していくわけであるが、しかしジェファソンは農耕生活をえらぶ開化派のインディアンに対してまでこの移住政策を適用する意図はなかった。また狩猟派に移住をうながすとはいっても、それを強制するという考えはもちあわせてはいなかった。開化派に対してはジェファソンはルイジアナ購入以後もあいかわらず、農耕生活と私有財産制の観念をかれらのあいだに浸透させることに努力し、多数決の原理や代議制の採用を呼びかけている<sup>(30)</sup>し、開化派に農耕を勧めるにせよ、狩猟派に西方移住をうながすにせよ、インディアン意向を無視してまで土地を取り上げるつもりはなかった。それはたとえば、北西部条例 (一七八七年) の第三条で、「インディアンに対してはつねに最高の信義が守られなくてはならない。かれらの土地と財産を、決してかれらの同意なしに取り上げることがあってはならない。連邦議会が認可した正当で法にかなった戦争による場合を除いて、かれらの財産と諸権利と自由を侵害したり、乱したり



してはならない<sup>(31)</sup>」と強調しているとおりである。ジェファソンはインディアンに対してもこの点を次のように繰り返し強調している。

「われわれはいかなる国民からも、その国民に属するものを奪いとりはしません。われわれの人口は増大しつづありますから、われわれは赤い肌をした兄弟たちから、かれらが売りたいと思うときには、いつでも喜んで土地を買う所存です。しかし安心していただきたいのですが、われわれはかれらの所有物に手を出して、かれらら不安に陥れるつもりは毛頭ありません。それどころか、双方の合意によって双方のあいだに確立された境界線は神聖なものとして維持されるでありましょう、その境界線はあなたがたの土地を、わが国民による侵害や他のいかなる国民による侵害からもまもるでありましょう<sup>(32)</sup>」(チョクトー・ネーションに対する呼びかけ。一八〇三年一月一七日付)。

「われわれは膨張しつづある国民です。ですからあなたがたが土地を売りたいときにはいつでも、買う用意があります。しかしそれはあくまであなたがたの自由意志に従ってのことです」(マッキントッシュとクリーク・ネーションの指導者たちへの呼びかけ。一八〇五年一月二日付<sup>(33)</sup>)。

「ある特定の場所で土地が足りなくなったので、われわれがあなたがたに土地を売ってほしいと頼むようなときでも、あなたがたはいつでも率直に『ノー』ということができます。そう言ったからといって、あなたがたに対するわれわれの友情が損なわれることはありません。われわれは他人が自分自身の利益であると信じているところ

にしたがって、自分自身の権利を行使したからといって、怒ったりはしません。……(中略)……われわれはあなたがたの自由意志を支配するつもりはありませんでしたし、今後もしそういうつもりは決してありません」(オタワ、チピワ、ポウテワタミ、ワイアンドットおよびサンダスキのセネカの指導者たちへの呼びかけ。一八〇八年四月二二日付<sup>(34)</sup>)。

ジェファソンのインディアン政策は一歩踏み込んでみるかぎり、独善的な人道主義といい、土地獲得の打算といい、致命的な限界が見られることはたしかである。しかしそうした点を考慮に入れてもおかれの姿勢には、後の連邦政府のインディアン政策と比べてみた場合、一種のギリギリの歯止め(この歯止めが欠落したときには、たしかに赤裸々な土地収奪の論理のみになってしまうわけであるが)のようなものが感じとられる。文明化政策が後年土地収奪のためのたんなる手段と化していくことは事実である。しかしジェファソンの文明化政策はたんなる打算や良心の気休めとしてのみ打ち出されているとは思えないのであって、たとえば混血や同化の提唱は、撲滅や土地収奪の論理だけでは出てきようのないものである。この点を見るために次節ではジェファソンのインディアン政策の根底に敷かれているインディアン本性論(資質論)を取り上げることにしたい。

## 二、インディアン本性論

ジェファソンがまとめたかたちのインディアン論を展開しているの

は、『ヴァージニア覚え書』の「質問6」においてである。その骨子は一言でいえば、インディアンの資質（本性、nature）は白人のそれと同じであるというもので、「質問14」に出てくる黒人論、すなわち黒人の劣等性はかれらの資質に由来するというところえかたとは鋭い対照をなしていることが分かる。「質問6」でジェファソンは、アメリカ大陸に棲息する生き物（四足動物）は「退化」（小型化）する傾向があり、先住民インディアンもその例外ではないというフランスの博物学者ビュフォンの説を取り上げて、それに反論を加えつつ自分自身のインディアン論をまとめたかたちで展開している。ジェファソンはまずビュフォンのインディアン論を次のように引く。

「新世界の野蛮人（savage）が我々の世界の人間とほとんど同じ体格をしているといっても、それだけで新大陸全体における自然の退化という一般的な事例の例外といえるわけではない。野蛮人は生殖器が脆弱で短小である。毛もなくひげもなく、女に対する情熱もない。走る習性があるためにヨーロッパ人に比べて身軽ではあるが、身体は弱い。また感覚はにぶいが、しかし、より怯懦で臆病である。敏捷さもなく、精神の活力もない。……（中略）……かれらには、女に対する愛情がないくらいであるから、同類に対する愛情などというものもない。……（中略）……父母や子供に対するかれらの愛情も乏しい。……（中略）……したがって、いかなる集合も、社会も、国家もないというわけである。……（中略）……かれらの心は冷えており、かれらの社会は凍っており、かれらの国は無情である。かれらは妻たちを苦役をさせるための奴隷か、さもなければ、思いやりもなく狩りの獲物を背負わせたり、同情も感謝の念もなしに力以上の仕事をさせたりするための駄獣ぐらいにしか考えていない。子供もわずかしがなく、面倒もみない。……（中略）……そして性に対する無関心さは、自然を退化させ、花咲くことを妨げ、生命の芽を破壊し、同時に社会の根をたち切る根源的な欠陥なのである」<sup>(35)</sup>

ジェファソンは、このビュフォンの描写が下敷にしているのはスペイン人著述家たちの広めた南米のインディオに関する蔑視的な記述であり、そうした記述は知識というよりせいぜい「イソップの寓話」<sup>(36)</sup>とおなじ程度の信憑性しかもたないものであると一蹴した上で、ビュフォンがインディアンの特性として挙げているものは天性の資質（nature）に根ざしたものではなく、環境や慣習によって生み出されたものにすぎないとしてインディアンの弁護論を展開している。たとえば、右の引用文の後半に出てくるインディアンの女たちは不当な苦役に供されているという点については、「私の考えでは、これは未開の種族のすべてにいえることである。未開人にあつては、力が法なのである。……（中略）……生まれながらの平等を享受する地位に女を戻すのは文明社会だけである。……（中略）……もしもわれわれがインディアンと同じように未開の状態にあれば、わが女性たちも同様に苦しい仕事をさせられていることであろう」<sup>(37)</sup>と述べて、置かれた状況のせいになっている。また子供の数が少ないという点に関しても、「この理由は資質（nature）の相違にあるのではなく、環境（circumstance）の相違にある」<sup>(38)</sup>。すなわち、インディアンの場合、女たちも戦闘や狩猟の部隊に参加する機会が多いの

で、出産は足手まといであり不便である。したがって彼女たちは墮胎の習慣を身につけるにいたった。またインディアンは毎年一定の時期に食料を森の落穂に依存するような生活を送っているので、年に一度は飢えに直面していることになる。ところでもし動物の雌雄が満足のいく食料を与えられないなら、当然「生殖はますます不活発で非生産的に」<sup>(39)</sup>ならざるをえなくなるが、おなじことがインディアンの場合にもいえる。ちなみに、「この同じインディアン<sup>(40)</sup>の女たちでも、妻子に豊かにかつ規則正しく食事を与え、過度の労働をさせず、彼女たちを事故の危険にさらさずにおくような白人の交易業者と結婚した場合には、白人の女たちと同じ数の子どもを生み育てるのである」<sup>(41)</sup>。またインディアンが白人よりも体毛が少ないという点については、「かれらの社会では体に毛が多いのは不名誉なことなのである。かれらは、毛が多いと豚に似るのだといっている。だからかれらは、毛がはえるとすぐにむしりとってしまう」と述べ、「インディアンの場合も白人の場合も、資質(nature)は同じである」<sup>(42)</sup>、かれらは「肉体的にも精神的にも『ヨーロッパ人』と同じ尺度につくられてゐる (they are formed in mind as well as in body, on the same module with the "Homo sapiens Europaeus")」のだと述べて、白人とインディアンとの資質の同一性を再三再四強調している<sup>(43)</sup>。

ジェファソンは『ヴァージニア覚書』「質問14」で黒人と白人の差異、黒人の劣等性を論じたときには、インディアンの場合とはちょうど逆に、「黒人たちが白人と混りあうやいなや、身心ともに進歩向上することは、誰もが目にしてきたところであるが、その事実、黒人の劣等性が単に彼らの生活条件の結果だけではないことを物語っている」<sup>(44)</sup>と述べ

て、黒人の劣等性を環境ではなく人種資質へと帰したのであった。しかもこの主張を補強するために、かれはわざわざローマ時代の奴隷(白人奴隷)の例をもち出して、白人奴隷の場合は、たとえ置かれた生活条件が劣悪でも優れた才能を発揮したという点を指摘している。すなわち、ローマ時代とくにアウグストゥス時代の前後には、奴隷たちの置かれた状態はアメリカ南部の黒人奴隷のそれと比べてずっと悲惨なものであった。にもかかわらず奴隷たちはしばしば類い稀な芸術家であったし、学問上の造詣も深く主人の子供の家庭教師として雇われていたほどであった。「エピクテトゥス、テレンス、フェドルスなどは、いずれも奴隷であった。しかし、彼らは白人奴隷であった。だから、白人と黒人との相違を生みだしているものは、彼らのおかれた条件(condition)なのではなくて、資質(nature)だということになる」<sup>(45)</sup>というわけである。

いずれにしてもジェファソンは黒人とは対照的に、インディアンを資質の上で白人と同等視するわけであるが、ある点ではインディアンを白人以上に美化して描いている面すらある。たとえば、卑屈で淀んだような精神状況のなかに暮らしているかのように描くビュフォンのインディアン論に對置して、かれは手放しの称賛をこめて次のようなインディアン論を展開している。

「インディアンは、大群の敵に対しても自らを守ろうとし、たとえ自分をていねいに扱ってくれると分かっている白人が相手の場合であっても、つねに降伏よりは死を選ぶ。その他の状況にあっても、かれはより慎重に死に立ち向かい、また、われわれの社会における宗教的熱狂にもほとんど見られないほどの固い決意をもって拷問に

耐えるのである。インディアンは子どもを愛し、大切にし、そして極端なほど子供に甘い。かれの愛情はこの他の関係にある人々をも包んでおり、輪から輪へと、中心から遠ざかるにつれて愛情もうすれていくのは、われわれの場合と同様である。インディアンの友情は、もっとも遠い友人に対しても強く忠実である。インディアンの感受性は鋭敏で、戦士でさえ子供を失ったときにははげしく泣く。ただし一般にかれらは人事を超越しているかのようにみせようと努力するが。インディアンの精神の活発さや活動は、同一の状況下ではわれわれと異なるものではない。<sup>(46)</sup>

この毅然としたインディアン・イメージは、『ヴァージニア覚書』の「質問14」に出てくる次の黒人観とみごとに対応しあうものであり、この二つの人種をまったく別個の章で論じつつも、ジェファソンが両者を意図的に対置させてとらえていたことがよく窺える。すなわち、

「黒人は少なくともわれわれと同じ位には勇敢であり、われわれ以上に大胆である。しかし多分このことは、彼らが先のことを考えない点に由来するものであろうし、そのために危険がさし迫るまでそれに気がつかずにいるのだ。ひとたび危険が現われると、彼らは白人よりも冷静沈着にそれを切りぬけるわけではない。彼らは白人よりも熱烈に女性を追求めるが、彼らの場合愛情とは、情操と感動がやさしく微妙に混りあったものというよりは、強い欲望であるようにみえる。また彼らの悲しみはすぐに消えてしまう。……(中略)……一般的にいえば、黒人たちの存在は、熟慮よりも感覚という性格をよけいもつように見える。このことが、娯楽をやめ

たり仕事についていないときにはすぐ寝てしまうという彼らの性癖の原因であるにちがいない。<sup>(47)</sup>

インディアンと黒人の精神能力を、「頭脳の資質」(理性)と「心の資質」(道徳感覚)という点に限定して見るならばどうなるであろうか。ジェファソンは『ヴァージニア覚書』の「質問14」で、黒人の「頭脳の資質」を白人のそれと比較して、「記憶、推理、想像などの能力で彼らを比較してみると、記憶力の点では白人と同じであると思われるが、推理力では、ユークリッドの研究を追ったり、理解したりすることのできるものはほとんどいないだろうから、白人に比べてかなり劣っており、想像力は鈍く、下品で、異常である<sup>(48)</sup>」と論じて、あからさまに劣等視した。ただ黒人の「心の資質」に関しては、「さらに研究が進んで、頭脳の資質」という点では自然が黒人たちに白人ほどのものを授けなかった、というこの推測が実証されることになろうと、なるまいと、とにかく私としては、心の資質という点では、自然は黒人に対しても公平であったということが理解されるだろう、と信じている<sup>(49)</sup>と述べて、誠実さ、忠実さ、ひとに感謝する気持ちといった点では、黒人は天性のいい資質をもっているとしたのであった。

黒人がこのように、「心の資質」はともかく、「頭脳の資質」(すなわち理性)で劣っているということは、そのまま黒人の文学作品にも反映されているとジェファソンは見る。その一例としてかれはイグナチウス・サンチョの書簡文をとりあげ、この人物の作品は「理性(the head)よりも感情(the heart)に重きをおいたもの<sup>(50)</sup>」になっているとした上で、次のような酷評を加えている。

「かれの想像力は粗野で非常識なものであり、たえず理性や気品などのあらゆるワクから逃避して、その奔放な空想の過程で、まるで大空を貫く流星の進路のように、気まぐれで風変りな思想空間を残していくのである。彼が扱う主題からすれば、彼はしばしばまじめな推理の過程に進んでいて当然だと思われるのだが、実際には彼はいつも感情をもって論証の代用としているのである」<sup>(51)</sup>。

このあとジェファソンは、黒人作家のなかではたしかにサンチョが「第一級の存在」であるにしても、白人作家と比べると「最低の位置」に置かざるをえないとした上で、「この批評は、彼の名によって出版された書簡文が、まぎれもなく本物であり、誰の修正も受けていないものである、と仮定した上でのことであるが」<sup>(52)</sup>とわざわざつけ加えている。つまりサンチョの作品には白人の手が加わっている可能性があると疑っているわけで、黒人にまともな文学作品など書けるはずがないと決め込んでいたふしが窺われる。

しかしジェファソンはインディアンに関しては態度を一変させ、かれらは「最高級の雄弁でわれわれを驚かせるが、それは彼らの推理力や感情がなかなか強いものであり、彼らの想像力も強烈で気品があるということ<sup>(53)</sup>を立証している」として、インディアン<sup>(54)</sup>の「頭脳の資質」に手放しの賛美を送っている。また第二次大統領就任演説（一八〇五年三月四日）の中でも、インディアンは「生来人間としての能力と権利をもっており」<sup>(55)</sup>（*Endowed with the faculties and the rights of men*）と述べて、人間としての資質と権利をインディアンに認め、インディアンに対する呼びかけのなかでも、「われわれが勤勉によって、そしてわれわれと同様あな

たがたも持ちあわせているあの理性を行使することによって、いかに増大したかを見てください。同胞諸君、われわれの例を見習ってください。わたしたちは大いに喜んで諸君に援助の手を差し伸べるでありましょう」<sup>(56)</sup>（*（チャクトー・ネーションへの呼びかけ。一八〇三年二月一七日付）*）と述べて、理性の行使を再三呼びかけている。「あなたがたと同様、われわれもおなじ土地に生を承けたアメリカ人です（*We, like you, are Americans, born in the same land.*）」<sup>(57)</sup>（*Brother John Baptist de Coigne に対する呼びかけ。一七八一年六月付*）というインディアン指導者に対するジェファソンの呼びかけといい、インディアン青年に大学教育を提供しようとした当時の風潮といい、これらの発想にはイギリスとの対抗上インディアン<sup>(58)</sup>の友好をつなぎ止めておきたいという思惑も当然混じっていたであろうが、しかしインディアンを理性的存在とみなし、白人と同質視する態度が根底になくは出てきようのないものである。

インディアンを理性的存在としてとらえるジェファソンは、インディアン<sup>(59)</sup>の表現能力に関しても、黒人の場合とは打ってかわって最高級の賛辞で絶賛している。『ヴァージニア覚書』の「質問6」でかれはインディアン<sup>(60)</sup>の「傑出した雄弁さ」に言及して、「たとえば私は、ミンゴ族の指導者ローガンが当時本邦の総督であったダンモア卿に宛てた演説よりもすぐれた一節を、デモステネス、キケロ、およびこの二人よりも著名な雄弁家——もしこれまでのヨーロッパにそのような者がいたらの話だが——のあらゆる演説の中に見出せるか、と挑戦してもよいと思っています」<sup>(61)</sup>と述べている。このあとジェファソンが具体的に引用しているロー

ガンの演説が、ジェファソンのいうほどの名演説なのかどうかは判断し兼ねるが、とにかくかれがインディアン表現能力に黒人の場合とは正反對の評価を下していることだけはたしかである。

ローガンと並んでジェファソンに深い感銘をあたえたもうひとりのインディアンにチェロキー族の指導者アウタッセトという人物がいるが、ジェファソンはアダムズにあてた手紙のなかで、青年時代にこのアウタッセトの演説を聴いて畏敬の念に身を震わせたときの思い出を印象的な筆致でつぎのように描いている。

「独立革命以前にはかれらはしばしばそれも大勢で、わたしたちの政庁所在地にやってきましたので、わたしはかれらと親密に接触しました。わたしはチェロキー族の戦士であり雄弁家でもあった偉大なアウタッセト（すなわちアウタシテイ）のことをよく知っていました。かれはウィリアムズバーグを訪れる際やその帰途、いつもわたしの父の家の客人になったものです。アウタッセトがイギリスに向けて旅立とうとしていた前夜、かれが部族のひとびとをまえにすばらしい別れの演説をした際、わたしはかれの幕営地にきていました。月は一点の曇りもなく皓々と照り輝いていました。アウタッセトはその月に向かって、航海中のみずからの無事と、かれの不在中の部族の無事を祈って語りかけるがごとくでした。かれのよく響きわたる声、明瞭な語調、生き生きとした身振り、あちこちで焚火を囲むかれの部族のひとびとの厳肅な沈黙。アウタッセトの発する言葉の意味は一語も分かりませんでした、その場の雰囲気はわたしの心を畏怖と尊敬の念で一杯にしました」（一八二二年六月一

日付）<sup>(59)</sup>

ここでも語られているように、ジェファソンは父親がインディアン指導者によく宿を提供し、客人としてもてなすなどしていた関係上、子供のころからインディアンと接触する機会が多かった。ここに出てくる演説は一七六二年にアウタッセトがウィリアムズバーグでおこなったものであり、手紙の書かれた日付から判断して、ジェファソンが二十歳前後のころのことであるが、それを齢七十近くになってこのように回顧しているわけで、受けた印象がいかに強烈かつ鮮明であったかがうなずける。黒人に対してはただあからさまな違和感と蔑視しか示さなかったジェファソンも、インディアンに対しては実感に根ざした次元でこうした畏敬の念のようなものを抱いていたわけである。

## おわりに

ジェファソンのインディアン政策は独善的な人道主義に彩られており、土地の入手をもくろむ打算が働いているなど数多くの限界をもっているが、かれを土地の収奪のみに専念する策略家として描くのは単純化のしすぎというものであろう。ジェファソンの政策は、文明化路線を受容していたチェロキー族などの南部開化五部族をもミシシッピ以西の地に強制移住させようとしたアンドルー・ジャクソン大統領の問答無用式のやり方とはやはり明確な一線を画している。もしインディアン撲滅だけが目的なら、あるいは土地の収奪だけが目的なら、移住路線一本でいけばいい（つまりジャクソンがしたように、開化派のインディアンに

も移住路線を適用すればいい) ことであり、すくなくとも混血を提唱する必要などは最初からなかったはずである。

ジェファソンのインディアン政策の根底には、インディアンの資質を白人のそれと対等視する人種観が敷かれていたと見てよい。そしてかれのインディアン論をアメリカ白人のインディアン論の系譜のなかにおいて見るならば、それはその後の世代のインディアン論とははっきり違っていることが分かる。ちなみにリンカーンに心酔した白人デモクラシーを賛美したウォルト・ホイットマンは十九世紀中葉を代表する国民的詩人として名高いが、かれは『草の葉』のなかで、「私は太陽がこれまで照らしたうちで、最も優れた民族を生み出そう、……(中略)……私はアメリカのあらゆる河川に沿って、また大湖水の岸辺に沿って、また大草原の上に遍ねく、樹木のように深々と友愛を植えつけよう、……

(中略)……(おお、デモクラシーよ、わが女性よ、あなたに仕えるために、私はこれらのものをあなたに捧げる!」と歌う一方、インディアンに関しては、「赤い肌をした原住民たちは、自然の息吹、雨と風の音、森の鳥と動物たちの鳴き声に名前を残した。オコニー、クーサ、オタワ、モノンガヘラ、ソーク、ナッチェス、チャタフーチー、カケタ、オロノコ、ウォバッシュ、マイアミ、サギノー、チピワ、オシユコシュ、ワラワラ。これらの名前を諸州に残し、水と土地を名前で満たしながら、かれらは溶け去り、立ち去っていく」と無感動に歌い、新しい文明をたずさえた「新しい人種が先住諸人種を支配する」事態のなりゆきに手放しの賛美を送ったのであった。<sup>(61)</sup> インディアンを歴史の舞台から消え去るべき人種、自然景観の名前の中にのみその名残りをとどめているだけの

人種として絶滅を自明視しているわけである。このような受けとめ方はインディアンのリゴリズムに深く共感し、アウタセットの演説に畏怖と尊敬の念で身を震わせたジェファソンの感じ方とは雲泥の差があるといえよう。

ジェファソンのインディアン観は、かれの黒人観とも決定的に異なっており、かれはインディアンと黒人を対照的にとらえていたふしがある。黒人は理性面で欠けるところがあり、白人の人種資質の水準にまで達していないので、共和国の健全な担い手になることはできないとかれは考えていた。また、このような劣等人種と白人との混血は、白人の「高貴さと美しさ」を損ない、「自然が定めたとおりの序列」を乱すことになると、避けなくてはならないとも考えていた。こうした人種観からは、結局黒人は国外へ除去されなければならないという植民の提唱以外に出できようがなかったといえる。

ジェファソンは、インディアンに関してはこうは考えなかった。むしろインディアンは心身両面で白人と同じであり、理性的存在であるとして、これを同格に位置づけたのであり、インディアンの資質を描くかれの筆には古くから伝わる例の「高貴なる野蛮人」のイメージを受け継いで、その猛々しい気品を賛美する心情すら感じとられる。文明化政策、すなわち農耕、家内工業、代議制民主主義の勧めなどは、この同質性を前提として提唱されたものであった。黒人植民が混血の防止を主たる目的として構想されたものであったとすれば、インディアンの移住政策は土地の獲得を目的にして構想されたのであり、混血に対する嫌悪感からではなかった。こうした対照的な政策の相違は、いずれもかれの人種観

から導き出されているといえる。

# 注

- (1) Saul K. Padover, *The Complete Jefferson* (New York: Duell, Sloan & Pearce, Inc., 1943) p.489. (以下『Complete』として引用する)
  - (2) *Ibid.*, p.474.
  - (3) ノール・K・パドヴァー編(富田虎男訳)『ジェファソンの民主主義思想』(有信堂、昭和三十六年)、「二五—二六頁」。
  - (4) 同右、一二六頁(訳は一部変更)。
  - (5) Merrill D. Peterson, ed., *Thomas Jefferson. Writings* (New York, N.Y.: Literary Classics of the United States, Inc., 1984), p.513.
  - (6) *Complete*, p.483.
  - (7) *Ibid.*, p.489.
  - (8) *Ibid.*, p.512.
- ジェファソンは一七八一年にインディアン指導者の Brother John Baptist de Coigne から学校の教師を派遣してほしいと頼まれた際、いまは戦争が吹き荒れているが、平和が回復したら、たちちにもっとも優秀な教師を派遣したいと伝えている (Peterson, ed., *op. cit.*, p.554)。また一八〇五年にはチヨクトー・ネーションに、鋤を送る約束をしながら、それがまだ届いていないという催促を受けたらしく、たちちに送ったのだが、手違いが生じたらしいという詫びをいれている (Complete, p.472)。
- (9) パドヴァー編、前掲書、一二六—一二七頁。
  - (10) *Complete*, p.497.
  - (11) *Ibid.*, p.509.
  - (12) Peterson, ed., *op. cit.*, p.1115.
  - (13) Robert McColey, *Slavery and Jeffersonian Virginia* (University of Illinois Press, Second Edition, 1973), p.138.
  - (14) ジェファソンはインディアンに対してつねに友好的な態度で接したわけではない。独立戦争中、あるいは一八二二年戦争中イギリスと協同してアメリカ白人を殺戮し、アメリカを危機に陥れたインディアン諸部族に対し

では、打って変わった態度で絶滅や駆逐をしばしば口にしてはいる。たとえば独立戦争中(ジョン・ペイジ(John Page)にあてた手紙(一七七六年八月五日付)のなかで、インディアンが戦争をしかけてきたことを非常に遺憾に思うと述べた後、「かれらの国の心臓部にまで戦争を押し進めていく以外、あの卑劣漢たちをすみやかに屈服させる方法はないでしょう。しかしわたしは決してそこで手を止めはしません。かれらのうち一人たりともミシシッピ川のこちら側に留まっているかぎり、わたしはかれらを追撃する手を止めはしません」(Boyd, *The Papers of Thomas Jefferson* [Princeton, New Jersey, 1950] 1485-486)と述べて、あからさまな敵意を示した。またアダムズにあてた手紙(一八二二年六月一日付)のなかでは、チェロキー族の指導者アウタッセットに関する感動的な思い出を語ったそのすぐあとで「打って変わった調子でつぎのように述べている。」「進歩を遂げたインディアンには、イギリスの誘惑は効果をもたないでありましょう。しかし未開な部族はそれに屈服し、さらにいつそう後退していくであります。これらの部族は野蛮と悲惨な状態へと逆戻りし、戦争と窮乏によって数を失うことでしょう。われわれはかれらを森のけだものたちと一緒に、石山山脈(the Stony mountains——ロッキー山脈のこと。筆者)にまで駆逐しなくてはなりません。かれらはしかしカナダでは平定されるであります。カナダを掌握すれば、連中を喰っている者たちを除くことになり、われわれの婦女子をトマホークと頭皮はぎのナイフから永久にまもることになります」(Peterson, ed., *op. cit.*, p.1264)。また同様にアレクサンダー・フォン・フンボルト(Alexander von Humboldt)にあてた手紙(一八一三年二月六日付)のなかでも「かれら(イギリス軍——筆者)はわれわれの近隣諸部族の大部分を喰して、戦争をたらせてわれわれに立ち向かわせました。かれら(インディアン——筆者)がフロンティアの婦女子に不意打ちをかけておこなった残忍な虐殺は、われわれをしてかれらを絶滅へと追いこみ、われわれの領域外の新しい居住圏へと駆逐することを余儀なくさせるものであります」(*Ibid.*, pp.1312-1313.)と述べている。

これらの言葉はイギリス軍に荷担してアメリカ白人に盾ついたインディアンの敵対行為に対する憎悪を表明したものであり、この感情はジェファ



ソンが英軍に対して燃やした敵愾心とおなじ程度に当然の感情であったといえる。つまり交戦状態に入った人間の心理としては当然すぎるものであり、これをもってジェファソンの偽善や思想的限界を云々するのはむしろおかしいことである。ここには未開への嫌悪は若干表明されているが、しかしインディアンは「資質が劣等である」とはいいない。

なおロレンスは『アメリカ古典文学研究』の第四章で、「白いアメリカ人の魂のなかには、いつもインディアンに関する二重の感情が宿りつづけてきた」、すなわち「インディアンを撲滅したい」という願望。そしてそのインディアンを美化したいという矛盾した願望」が存在してきたという点を指摘し、それぞれを具体的に示す人物としてフランクリンとクレヴクルを挙げている。この図式をもちだしていえば、ジェファソンの場合、同一個人の中に二つの願望が同居していたということになる。ただこの図式自体はきわめて興味深いといえるが、本稿の観点にとっては別段なにも示唆するものではない。酒井雅之訳『D・H・ロレンス』(アメリカ古典文庫 12) (研究社、一九七四年) 八六―八七頁。

(15) パドーヴァー編、前掲書、一二三頁(訳は一部変更)。

(16) 一八〇二年にインディアンを指導者ハンサム・レイクに対しておこなった呼びかけ(一八〇二年一月三日付)のなかに出てくる表現である。Peterson, ed. *op. cit.*, p. 567.

(17) ベンジャミン・ホーキンスにあてた手紙(一八〇三年二月一日付)に出てくる表現。Ibid. p. 116.

(18) アレクサンダー・フォン・フンボルト(Alexander von Humboldt)にあてた手紙(一八一八年二月六日付)に出てくる表現。Ibid. p. 1312.

チェロキー・ネーションへの呼びかけ(一八〇六年一月一日付)のなかでは、あなたがたはかつては狩りと戦争に注いでいた労力を耕作と織布と牛、豚、馬の飼育に振り向けていますと述べた後で、「どうか皆さん、現在のままの方法でやってください。この点で上達すればするほど、あなたがたはいっそう幸福になり、かついっそう立派になれるのだということを確信してください」(Ibid. p. 561.)と述べている。

(19) パドーヴァー編、前掲書、一二四頁(訳は一部変更。パドーヴァーが省略している箇所は、Peterson, ed. *op. cit.*, p. 560 によって補足している)。

(20) 同右、一二四頁。

(21) 池田孝一訳『ベンジャミン・フランクリン』(アメリカ古典文庫 1) (研究社、一九七五年)、一二九頁。

(22) 同右、一二三頁。

このエピソードは一七七四年のものらしい。この時インディアンの六部族連合(イロクォイ族連合)がヴァージニア植民地に送った返事の全文は、ラング(刈田訳)によれば、次のとおりである。

「挨拶を送ります！」

あなた方が大学で教えられるたぐいの知識は高く評価していますし、わが国の若者がいっしょに教育される場合、あなた方の出費が大変なものになることも承知しております。それ故、われわれのためになることと考えた上のご提案であると得心いたし、心から感謝いたします。しかし、賢明なる皆様には、国が異なればものごとに対する概念も異なるものだとお分かりただけでしょう。また、この種の教育についてたまたまわれわれとあなた方の考えが同じでないからといって、気を悪くなさることはないでしょう。われわれには以前にもこうした経験がありました。幾人かの若者が北部の大学で正規の教育を受け、あなた方の学問をすべて教わりました。しかしここへ戻ってきたとき、彼らは足の遅いインディアンとなり、森で生活するためのあらゆる手段にうとく、寒さにも飢えにも耐えられず、小屋を建て、鹿を捕らえ、敵を殺す方法が分からず、われわれの言葉を十分に話すこともできず、それ故彼らは狩人にも戦士にも指導者にも適さない、つまり全く何の役にも立たなくなったのです。しかしながら、あなた方の親切な申し出を辞退したからといって、有難く思っていないわけではありません。このことについてわれわれが感謝している気持ちを表すために、バージニアの名士方のご子息十二人をわれわれのもとに寄こしてください。教育に留意し、われわれの知識をすべて教え、彼らを一人前の男にしてさしあげます。

六部族連合

(H・ジャック・ラング編(刈田元司訳)『手紙のなかのアメリカ』(社会思想社、一九八六年)、一二―一二四頁)。ここで六部族連合が指摘している「国が異なればものごとに対する概念も異なるものだ」という認識がジ

エファソン本人には欠けているわけである。

- (23) *Complete*, p.504. (日付は記されていない)
- (24) Peterson, *op. cit.*, p.556.
- (25) *Complete*, p.471.
- (26) *Ibid.*, p.474.
- (27) Peterson, *op. cit.*, p.1115.
- (28) Adrienne Koch & William Peden, eds, *The Life and Selected Writings of Thomas Jefferson* (New York: Random House, Inc., The Modern Library, 1944), p.571. じつではすてのインディアンを移住させるかのような表現をしているが、すぐ後にも触れるようにジェファソンは実際にはそういうやり方はしていない。かれが移住を勧めたのは狩猟派に対してだけである。
- (29) *Complete*, p.472.
- (30) たとえばチェロキー・ネーションの指導者に対する呼びかけ(一八〇六年一月一〇日付)のなかでジェファソンは相変わらず土地を囲いこんで財産を妻や子供に残し、また財産を守るために法律と裁判官をもつことの必要性を説いている(Peterson, *op. cit.*, p.561)。チェロキーのアー・タウンの代表たちへの呼びかけ(一八〇九年一月九日付)のなかでは、投票によって代表を選出し、その代表たちに犯罪者を裁き財産を守るための法律をつくらせ、またおなじく投票によって行政にあたる者を選ぶよう促している(*Complete*, pp.505-506)。
- (31) Henry Steele Commager, ed., *Documents of American History* (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1988), I, 131.
- (32) *Complete*, p.464.
- (33) *Ibid.*, p.474.
- (34) *Ibid.*, pp.491-492.
- (35) トマス・ジェファソン(中屋健一訳)『ヴァージニア覚え書』(岩波文庫、昭和四七年)「一〇一—一〇三頁(訳は一部変更)」。以後、中屋訳として引用する。
- (36) 同右、一〇三頁。
- (37) 同右、一〇五頁。

- (38) 同右、一〇五頁(訳は一部変更)。
- (39) 同右、一〇五—一〇六頁。
- (40) 同右、一〇六頁(訳は一部変更)。
- (41) 同右、一〇七頁(訳は一部変更)。
- (42) 同右、一〇八頁。
- (43) ジェファソンはビュフォンの「自然の退化」に関する論議を Chastellux にあてた手紙(一七八五年六月七日付)のなかでも取り上げており、そのでも同じように「わたしはインディアンは肉体と精神において白人とおなじであると信じています (I believe the Indian, then, to be, in body and mind, equal to the white man.)」(Peterson, *op. cit.*, p.801) と述べている。

- (44) 中屋訳、二五四頁(訳は一部変更)。
- (45) 同右、二五六頁(訳は一部変更)。
- (46) 同右、一〇四—一〇五頁。
- (47) 同右、二五二頁。
- (48) 同右、二五二頁。
- (49) 同右、二五六—二五七頁。
- (50) 同右、二五三頁。
- (51) 同右、二五四頁。
- (52) 同右、二五四頁。
- (53) 同右、二五三頁。
- (54) Peterson, *op. cit.*, p.520.
- (55) *Complete*, p.465.

ジェファソンはインディアンに対する呼びかけのなかで、繰り返し理性の行使をうながしている。たとえばチェロキー・ネーションの指導者たちに農業と家畜飼育にいそしみ、個々人が土地と財産を持つようになるれば、争いを調停するために、法律が必要になるはずであると、「理性とあなたごとの作りもつるルールにしたがって、人と人との争いに決着を下すには善良なひとびとを裁判官に任命しなければならないことがお分かりでしょう」(一八〇六年一月一〇日付) (Peterson, *op. cit.*, p.561.) と述べている。またマイアミ、ポウチワタミ、デラウェア、チビウェイ族に対しては、

イギリス人はあなたがたに狩猟を勧め、アルコールを供給し、戦争が起ったら、われわれアメリカ人に盾つくように促していますが、あなたがたの人口が現在のように減少してしまったのはイギリス人が勧めている路線にしたがったためであります。もしあなたがたがわれわれの勧めているように、禁酒と平和と農業の路線を採用するなら、あなたがたの祖先がそうであったときとおなじように人口も増えるでありましょうと説いて、「あなたがたはわれわれと同様、理性を持っています。ですから、われわれのうち、いずれが真の友人としてあなたがたに忠告しているか、あなたがた自身で判断がつくでありましょう」(一八〇八年二月二日付)(*Complete*, pp.496-497)と述べている。

- (56) Peterson, ed. *op. cit.*, p.551.
- (57) 中屋訳、一〇八頁。
- (58) 同右、一〇八一〇九頁(訳は一部変更)。
- (59) Peterson, ed. *op. cit.*, p.1263.
- (60) 「君のために、おお、デモクラシーよ」より。ホイットマン(長沼重隆訳)『草の葉』(角川文庫、昭和三十九年)、一四二頁。
- (61) "Starting from Paumanok" 45. Walt Whitman, *Complete Poetry and Selected Prose*, ed. James F. Miller, Jr. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1959), p.23.
- (62) 中屋訳、二五九頁。
- (63) 同右、二五九頁。

(原稿受理一九九四年十二月一日)